



食と農おおいた

2012年1月号 NO 85

生物多様性と有機農業に思う

理事長 吉野 賢一

謹んで新年のお慶びを申し上げます。

今年は辰年、「辰」は「漢書」律曆志によると「振(しん「ふるう」「ととのう)」の意味で、草木の形が整った状態を表しているとのこと。まさに、皆さん方の力とともに「おおいた有機農業研究会」を振興の年にしたいものだと思ってやみません。

私は、2011年1月号の「食と農おおいた」の原稿のタイトルも同じ標題でした。私の勤務する大分農業文化公園(以下:公園)で仕事を進める中で、生物多様性と有機農業の課題を切り離して考えることの出来ない環境にあるからです。

(1) 環境保護・再生委員会(以下委員会)の設置

昨年7月、日本文理大・杉浦教授を委員長及び他3名による委員会を設置し、当面ハッチョウトンボの保護・再生を図ろうとするものです。ハッチョウトンボは世界で最も小さなトンボの仲間として(体長が一円玉に隠れる大きさ)、大分県ではかつてここでしか生息していなかった貴重な昆虫でした。

何とか再生させたい願いから、トンボ池の湿地条件の発生環境を整備した結果、5月下旬から6月の間で最高の飛翔頭数日の調査結果80頭を確認出来ました。(NPO・トンボの会:長谷川正美理事調査確認)

このハッチョウトンボの発生についてはまさに感動的な出来事でしたが、このことを広く公表することを止めました。なぜなら、捕獲・乱獲による標本(セット)としてネット販売等を防ぐためであるとともに保護・再生を狙いとしたからです。

さらに、トンボ池の湿地には絶滅危惧植物のイヌタヌキモ(タヌキモ科)やミズトンボ(ラン科)も発見することが出来ました。(大分県植物協会:小代連枝氏調査確認)

今年は是非、絶滅危惧種のハッチョウトンボや植物の観察会を予定している所です。

まさに、生物多様性の課題は身近な足元から考え、取り組む必要があると教えられる一件でした。

(2) 別府大学「夢米(ゆめ)棚田プロジェクトチーム」の米づくり

別府大学食物栄養科学部・文学部史学・国際経営学部の学生1年から4年生らによる夢米(ゆめ)棚田プロジェクトチームが結成されており、当公園内に平成22年度整備・造成された棚田8a:4枚で米づくり体験に取り組みました。棚田の石組体験から籾播き・田植・草取り2回・

稲刈り（手刈り）・掛け干し・脱穀・籾すり等の一連の作業に取り組み、栽培品種は古代米の赤米を選択し、脱穀は千歯扱き・足踏み脱穀機・唐箕等用いた作業を行い、まさに日本の稲作文化や伝統の技術を学びとることが出来たと思います。

棚田 4 枚の内一番広い上段の水田で、無農薬・無化学肥料での栽培に挑戦し慣行栽培に劣らず十分な成果を上げることができたことも自信につながりました。

日本文理大・杉浦教授及び別府大学食物栄養科学部江崎教授のコラボレーションによる提唱、当公園発「夢米（ゆめ）棚田トンボ米」のブランド商品化も現実になりそうです。

まさに、生物多様性と有機農業の結節点は、これからの地域農業の振興や里山の保全を考える上でヒントになると考えられます。

「私たち人類は、気付かぬうちに多くの生き物を絶滅に追いやっています。今もなお、多くの生き物たちが絶滅の危機に瀕しています。このままでは、近いうちに人類は、多くの生き物を巻き添えに、地球上から消えてしまうかもしれません」 1

私たちの衣・食・住の生活は、地球上の多様な生命体によって支えられ、多くの恵みを受けています。環境に優しい持続的な有機農法の確立、消費者への安心・安全な農畜産物の供給、つまり生物多様性の保全と有機農業の確立は車の両輪として、バランス保ちながら、これからも求め続けなければならない短・中長期的な課題であると考えます。

まさに世界的環境意識の高まりと、有機農業推進（法）の時代の到来です。

引用図書

1：長谷川明子著「生物多様性」：技報堂出版

100 年後、トキが舞い降りる田んぼをめざして

～大分県竹田市岡本地区の“夢創造型の農村集落づくり”＜その1＞～

杉浦 嘉雄（おおいた有機農業推進ネットワーク 代表、日本文理大学 教授）

トキの夢

「トキ」と聞けば、ほとんどの人が「佐渡島（新潟県）」を思い浮かべるであろう。しかし、100 年ほど前、九州ではトキは留鳥、つまり一年中見ることが出来る身近な鳥であった。

「これまでの 100 年で、トキをはじめ九州の里山の生きものが生きにくくなったのなら、これからの 100 年をかけて、生きものたちと人が本当に共生できる里山にしていこう！」

…今から 10 年ほど前、そんな“夢創造型の地域づくり”が、大分県九重町ではじまった。

現在、九重町では、野生トキの生息地である中国陝西省（せんせいしょう）とのトキをテーマにした国際交流、佐渡島に小中学生を派遣する「トキこども大使」、九重町の田んぼを守る「トキの里クラブ」など、様々な活動が積極的に展開されている。

もちろん、今も“野生のトキ”は九重町には生息していない。

しかし、“トキの夢”は、九州の屋根といわれる九重連山をいっしょに飛び越え、竹田市にある一つの里山、岡本の集落に舞い降りた。今から6年前のことであった。

これは、岡本地区の“夢創造型の農村集落づくり”に関する記録である。

岡本地区の人たちとの出会い

九重町での“トキの夢”をテーマにした地域づくり活動の言い出しっぺであった私は、九重町の“夢活動”をお話する学習会の講師役として、竹田市岡本地区を訪れた。それが私と地元住民の方たちとの最初の出会であった。この地区では、農家の高齢対策として農道の整備や農機具が田んぼに入りやすくするためなどの理由で圃場整備事業を実施することになっていたが、有難いことに、そこに集まった岡本地区の方々、里山の生物たちに関心があり、私の話を一生懸命に聞いて下さった。

その直後の意見交流の中で、私が今でも記憶に残っている、彼らの“思い”、つまり“里山の生きものが生きやすくなるための彼らの意気込み”を列記してみる。

里山の生きもののためなら...

できあがった田んぼの面積を少々減らしても良い！

水路は、可能な範囲で、広くて曲線にしたい！

水辺は、自生の植物を大切にしたい！

地盤が岩盤なら、コンクリートを使わないようにしたい！

整備後の田には、水生生物たちが避難できる池をつくりたい！

水路と田をつなぐ水のネットワークこそ最重要なので、魚道などを設置したい！

この集落では、ごく一般的な圃場整備事業を実施するはずなのに、地元住民の環境配慮への積極的な姿勢があり、その背景には、住民共通の“豊かな自然観〔コスモロジー〕”を感じることができた。...これがこの地に訪れた最初の印象であった。

新年快樂！

おいた有機農業推進ネットワーク

副代表 國枝 剛



12月25日に中1の息子が「台湾に行きたい。」と、言ったので急遽チケットを手配し、年末年始5泊6日で、台湾へ行きました。

初日は、台湾南部の屏東市で、妻の両親のお墓参りをしました。その夜は、多量の酒を飲んだらしい?(ウイスキーを、一人で1本?)

大晦日に、南投県竹山鎮の「借金」ができるお寺「紫南宮」に行き、神様の前で「笏杯」を振り、最高額の600元を、お借りしました。(無期限ですが、利益が出れば謝礼をします)

台湾のお店はどこに行っても商魂逞しく活気に満ちていて、隙間なくお店が並んでいます。車やバイクも他車に遠慮なく走っていて、

とても危険でなりません。

台湾のある野菜畑では、キャベツや、トマト、ピーマンや現地の野菜が、きれいに植えられていました。よく見ると、虫食いも無く、雑草もありません。土の上にあるのは、粒状の肥料ばかりでした。(空の農薬の容器は、水路の中)

ふと、「モラルって何だろう。」などと、考えました。多数の人が納得できる常識かな？台湾の道路事情も、日本人には理解できない常識があるようです。

お店に並んでいる野菜等は、生産者のモラル・消費者のモラル・・・いいのかな？

私の栽培しているのは「かぼす」。有機栽培をしていると、弱い木は淘汰されます。木と木の間を広くすると、樹勢が強くなります。狭いとストレスを感じるのではないのかな。

取り留めの無い話でしたが、台湾で元気と現金をもらった。かぼす畑では元気をもらいます。そして、私は今日も、元気よくお酒を飲めます。祝
你們新年快樂



新春雑感

顧問 高倉志能

災害に思う

今春は1億総懺悔の年明けとなった。やがて一年にもなろうというのに復興はまだまだ。原発事故を思うとき、被災者の現場の目線で事が運んでないことが腹立たしい。放射能汚染情報は現場を忘れた情報公開で予想外の被害となったようだ。住民不在の危機管理の無さ、安全神話は崩壊し、現在科学文明の驕りが露呈された。広島、長崎の原爆被害で非核3原則を国是として誓いながら、原子力の平和利用という名の下で推し進めたのは誰か、原子力の制御は不可能と警告し続けた科学者(湯川秀樹、竹谷三男、等)反対した文化人(大江健三郎、澤地久恵、等)良心的な人々の姿が想いだされる。

さらに水素爆発による放射能汚染は古里の土を、動物、植物を、水を汚染してしまい、農作物のコメ、野菜、果物、家畜、茶まで汚染し、食の安全を破壊してしまった。子供の内部被爆や、農水産物の風評被害が心配される。わが有機農業研究会の発足記念講演をいただいた宇宙飛行士農民の秋山さんも原発難民となった。事故現場から35キロも離れたところで有機農業実践に奮闘されているさなかでの避難とは心中察するに余りある。脱原発、反原発の声を上げなくてはならない。

完全の廃炉には40年もかかるといわれ、この上は脱原発以外にない。ところが、東電を

はじめ、財界、政府まで再稼働の声が聴かれることはどうしたことか。 原発輸出まで考えているとは世界のひんしゅくを買うこと必定。

TPPについて

TPP参加について、一時かなり活発な反対の声が聴かれた。しかし、声高に言うだけでは議論は深まらない。メリット、デメリットの論点が聞こえてこない。「北の国から」の脚本家、倉本総さんの意見に象徴されている。彼曰く「土から離れた議論、農業を知らない東京目線の思考である」と。さらに「思想も民族性も一つにはならぬ、違い認める英知を」と。また、「日本は畏れを知らない国になっている」と。「ええ。日本は小国でもいいから尊敬される国を目指すべきではないですか。私はかねがね、ブータンが1つの理想だと思っています。来日したブータンの国王の姿を見ていると、実に素朴で、田舎の村長みただけど、日本人より人間の格が上だという気がする・・・」と。それぞれの国の生き方を認めて、そのうえで互いに助け合う、それが、これからの人間の英知ではないのかと結んでいる。(朝日12,9)

反対、賛成を乗り越えて日本の実態を理解したうえで日本の技術力、高品質な製造技術、円高を踏まえてエゴでなくお互い対等の上に立って協力、助け合うことではなからうか。

問題を整理したうえで、シンポジウムを開くことを期待したい。

「企業風土」に思う

副理事長 池本 和之

私は定年退職後の十年余、労働組合運動に関係しており、八年前からは大分地域労働組合の委員長を続けている。地域労組は、<雇用先や雇用形態のいかんを問わず、誰でも加入できる>のが特徴である。組合に寄せられる様々の相談の中から、<解雇><サービス残業などの賃金未払い><パワハラ><メンタルヘルス>などの問題を、雇用先の企業と団体交渉で、時には裁判で、解決を図るのが主な仕事である。

年々、相談と交渉は、数だけでなく複雑さと深刻さも増大している。そして、数年前から、交渉相手の対応の仕方を通じて伝わってくる企業体質の変化、つまり企業風土の荒廃が気になっている。私は、「社会に責任を負う存在である企業は、独自の風土を形成する」と思っている。よく管理された良質の土地=風土によい作物が育つと同様に、職場環境と労働条件がととのう企業=良好な企業風土から、よい製品やサービスが生まれる、と信じたいのである。

この10年来、日本の企業は大きく変わった。その風土は、相次ぐ規制緩和などの中で労働者保護のルールが影を潜め、安易な首切りや雇い止め、サービス残業の増大に象徴されるように、砂漠化している。全雇用者の三分の一を超える非正規雇用、しかも安易に使い捨てられている。年収200万円以下のワーキングプアは一千万人を超える。企業風土の主構成員である

労働者を、物同然に粗末に扱うこの国の企業。せめてヨーロッパ並みの、労働者が尊厳を有する人として扱われる企業風土を実現させたい。そうしなければ、企業のみならず、この国の風土までもが荒廃してしまうだろう。

私たちは、一昨年から、人間らしい労働を求める運動に取り組んでいる。

有機農産物の販売に携わって

豆の力屋 遠藤貴美（有機ネット推進委員）

初めに、私たちの命を支え、食の質を豊かにしてくださっている生産者の方々に、心より敬意と感謝を申し上げます。

私と有機農産物との出会いは、安心できるものを求め、生産者から直接農産物を買うようになったことでした。丹精込めて育てられた有機栽培の野菜の美味しさに出会い、同じ野菜でこんなにも味に違いがあるのかと驚きました。生産者の話を聞き、また人柄に触れることで、食の本当の豊かさを実感しました。

現在、私は有機農産物の販売に携わっています。その中で日々感じることは、何よりも“美味しかった”という思いが、お客様が再び店に足を運ぶきっかけになっているということです。そしてその思いは記憶に残ります。一つ一つの“美味しかった”という積み重ねが、有機栽培のものと、他のものとの違いを感じていただけることになるのではと思います。

また、産地直送であっても生産者とお客様との間に距離を感じる場合があります。例えば、露地物のパプリカは、実際の圃場では、着色を待つ間にその多くに虫食いができます。美しい形と鮮やかな色に育ち、商品として認められ、店頭に並ぶものが奇跡に思えるほどです。しかし、お客様はそのパプリカを手に取り、赤や黄色に緑色が混ざって鈍い色の部分があることを指摘される場合があります。その度に、圃場をみてもらいたいという思いが募り、また自分の説明の至らなさを痛感します。

生産者の方々がお客様に直接販売する際には、積極的にコミュニケーションをとっていただくことが一番だと感じています。自分のこだわりや圃場の現状、また苦労話などを伝えていただくことで、私自身がそうであったように、お客様も理解を深め、野菜の“美味しさ”をより一層感じていただけるのではないかと思います。そして一步一步、有機農業の繁栄につながっていくことを願っています。

有機肥料のことなら何でもご相談ください。土壌検査・施肥設計も致します。

（有）江島 大分県中津市山国町中摩

TEL 0979-62-3178 FAX 0979-62-2979

自然エネルギーと農業 NO.28

NPO 法人 九州・自然エネルギー推進ネットワーク小坂 正則

自然エネルギーは原発の代替エネルギーではない

よく、皆さんから「小坂さんは先見の明がありましたね」と、お褒めのお言葉をいただくことがあります。「原発事故が起きて、あなたの出番がやってきたね」ともよく言われます。でも私はそういわれる度に暗くなってしまいます。そうではないのです。「自然エネルギーは原発の代替ではない」のです。電力会社や国は「自然エネルギーを進めましょう」といいます。その代わりに、「自然エネルギーに変わるまでの20年間は原発を運転させてください」というのです。しかし、20年も私らは待つことはできません。その間に福島原発以上の事故がまたいつ起こるかもしれないじゃないですか。東海地震に東南海地震に南海地震と巨大地震が目の前に迫っているのです。だから、私は「今必要なのは自然エネルギーではなく天然ガスによる火力発電だ」と訴えています。「ガス・コンバインドサイクル発電ではエネルギー効率が59%にもなる優れた発電施設が日本の技術力でできるのです」と。原発の代替エネルギーとしてガス・コンバインドサイクル発電と企業の自家発電でカバーして、その代替エネルギーを20年かけて再生可能エネルギーに替えていけばいいのです。

東電は一旦倒産させて国有化し、発電は東電に残し、送電分部門は売却すべき

計画停電を東電は原発事故直後に実施しましたが、あれは国民に原発がなかったらこんなに不自由するのだという脅迫めいた「やらせ」だったという声があります。実は「停電などしなくても電気は足りていた」というのです。真相は闇の中ですが、電力会社の体質ではそれくらいのことは平気でやりそうです。これまで国民を騙し続けてきたのですから。

だから私は「原発を続けるのか。それとも原発を止めるのか」という議論を国民の前で公明正大にたたかわせるためにも国民に電力会社の持っている情報を全て公開させて、その上できちんと議論をするべきだと思うのです。だって、東電は国の資金をつぎ込まなければ倒産に追い込まれる会社なのですから、民間企業としての経営の自由などないのです。国家管理の倒産企業なのです。全てのウミをここで出せなかったら原発を巡る真実は永遠に出せません。



写真はてるてるちゃん2号(左)と9号(右)

自然エネルギーで地方の雇用と再生を

私は自然エネルギーの役目は原発の代替ではなく、地方で失われた雇用の再生だと思っています。地方ではエネルギー問題よりも雇用問題の方が深刻です。私の周りの若者には仕事がないのです。だから田舎にはほとんど若者はいません。みんな仕事がないから都会へ出て行ってしまいます。だから都会では仕事のない若者で溢れて、田舎では若者がいないのです。これって何か変ですよ。田舎は探せば仕事はたくさんあるのです。ただ、お金にならないだけです。林業も農業も漁業も老人福祉だってあるのです。それなのになぜ仕事を若者にやらせないのか私には不思議でなりません。

せっかく仕事ができるフィールドが山ほどあるのに「採算が合わないから」とう理由だけで仕事をさせなくて野山や田んぼは荒れ放題なのです。補助金までやって休耕田をわざわざこしらえているのです。採算が合わないからといって畜産もやめさせてしまうのです。これって何か変ではないですか。

若者を何もしないでブラブラ遊ばせるよりも何か仕事を与えてやる方が、彼らは生き生きと目を輝かせて働くでしょう。だから仕事を地域で回せばいいのです。それはアメリカのニューディール政策なども同じような理由から公共工事を進めたのです。いま、日本でダムや美術館を作る余裕はありません。だから石油の輸入で外国に支払う円を節約できる、石油代替エネルギーを国内で作り出すことで莫大な仕事を生み出せるのです。これこそ現代の公共事業といえるのではないのでしょうか。石油など化石燃料の輸入額は年間約 23 兆円だそうです。その三分の一でも自国の再生可能エネルギーでまかなえたら年間 7.7 兆円という莫大な産業が生み出されるのです。それだけではありません。それに伴い、彼らが働くために必要な衣食住の需要も生まれますから、その経済効果は何倍にも膨れあがります。

つまり木質バイオマスの燃料化で 7.7 兆円の産業を生み出せたら二酸化炭素はマイナス 30% の削減ができるのです。そして過疎地域に雇用も生まれ若者が村に帰ってくるのです。これをグリーン・ニューディール政策というのです。この金額は東京電力の売り上げ 5 兆 3000 億円よりも大きな金額になります。東電の社員は関連も含めて 53,000 人で平均年齢が 40 歳で年収が 761 万円です。の平均給与が 63 万円として、私ら地方都市の賃金労働者の平均給与が 15 万円とした場合、東電の社員の約 4 倍の雇用を生み出すことができるので、その雇用は 212,000 人となります。大分市在住の労働者数近くの人に新たな雇用が生まれるのです。



熊さんのトリ小屋通信

国東市 大熊良一

2011 年が終わった。最終週、私どもは連日配達が続いた。31 日の配達を 1 日繰り上げ、もちつき

が終わったのは、なんと、大晦日の31日であった。他人(ひと)さまの食べるものを届けるのに必死で、自分の食べるものが後回しになるとは・・・。

それでも、大晦日に逃げも隠れもしないで白日の下で過ごせたのだから(自慢になっていないが)文句は言えない。青島マラソンの2キロ過ぎの上り坂の眺めの様に、前を走る走者を見れば限りなく、後ろを振り返れば、「げえ～、後がない!!」(それでも何人かいる)状態か。銀行と農協の通帳残高をみると、調度、去年と一緒の金額である。使うだけの金額を稼ぎ出したと考えるのか、収入の範囲で何とかやりくりしたと考えるべきなのか、返答に困るので明言は避ける!

もちつきは、例年の様に杵と臼でついた。84歳の母が司令長官になり、家族全員の一大行事である。つくのは私と息子で交代でやる。今年の餅米の出来がいいのか、蒸し方が良かったのか、それとも丸め方が良かったのか、きめ細かく器量良しの餅になった。最後の臼は酢もちと黄粉もちにした。つきたての餅を小さくちぎって大根おろしに砂糖とカボスを加えたものに浸して食べるのが酢もち、黄粉に砂糖を加えたものにまぶして食べるのが黄粉もちである。どちらも美味しく、今も昔も農家の最高のご馳走である。年越し蕎麦は娘が打った。これが見事につながり、立派な出来となった。「まさか」の時の為に、こっそり、市販のそばを買っていた...?)最後まで、めでたし、めでたしである。今年は、お・わ・り。

このブログを始めて、12月30日で1031日だそうだ。読者は先刻ご存じのように、平飼養鶏家の日常は、何も珍しい事件は起きないし、笑える様な体験も少ない。つまり、ブログに書くことがないのである。しかも、芸能人のブログの様に写真を多用し、最後に3行ほど「～な～んちゃって」などというものならすぐできるが、一応一周間に一文、1000字程度書き、最後にオチの一つでも入れようとなると始終そのことを考えていなくてはならない。その上、まともな?物は読者がつかないのだ。写真も自分では入れられないので、娘が暇で、御機嫌のいい時に、まとめてお願いしている。何度も「これで止めます!」と書こうとしたのだが、それでも続けてきたのは、こんな駄文を読んでもくれる「少なくない?」(時々見る人を勘定に入ると、約1000人ほどか?)読者にこたえるためである。私の想いとまったく同じことを書いている偉大な先達がいるので、その格調高い名文を紹介(要訳)して、読者の正月を盛り上げようと思う?

「私には噴水のような思想も、偉大で華美な文章ももちあわせていない。宣伝しようと思う主義もなければ、運動と名のつくもの起こそうと考えたこともない。ただ私は、失望というものに、その大小にかかわりなく、苦い味わいのものだということを体験している。それで、この数年来、私に筆を取ることを希望する人があれば、お互いの意見がさして反対でない限り、そしてまた、私の力がにないえる限りにおいて、いつも、僅かなものながら、書きつつづつて、私に求める人に極めてささやかな喜びを与えようと努めてきた。人生は苦しみの多いものだが、しかし時には、人々は、ほんのちょっとしたことで、慰められもする。何も僅かな筆を惜しんで、余計な孤独の悲しみを味わせることはあるまい。～私の文章をひいきにして下さる顧客には、これによって、幾らかでも喜びを得ていただき、私の文章を憎むやからには少しでも嘔吐を催させてやりたいと願うだけである。～私の文章のお陰で、嘔吐を催すとならば、私はそれで愉快なのだ。～人々の中には、私は筆にまかせて、胸中にあることを、飾りなく、打ちあけていると考えている者があるが、実際は必ずしも

そうではなく、私の気がねは少なくないのだ。」青木書店 「隋感禄・北京通信」より

この文を書いた先達とは魯迅である。一言一句、私の想いなのである。

今年も よ・ろ・し・く。(ブログ 熊さんのトリ小屋通信より)

お知らせ

大分大学経済学部地域経済研究センターシンポジウム 入場無料

「農で生きる・農で生かす」 1月22日(日)13時半~17時

大分大学経済学部 101教室ほか

問い合わせ 大分大学経済学部教育研究支援室 097-554-7662

全体会議の後、三つの分科会に分かれて議論します。

農業と都市 農業と若者 農業と地域

第19回 火の国九州・山口有機農業の祭典 in くまもと

どぎゃんすつと?!「いのち」と「有機農業」

2月4~5日 2月4日(土)13時より 阿蘇の司 ビラパークホテル

申し込み 熊本県有機農業研究会 096-223-6771

有機農業公開セミナー in 大分・臼杵

2月25日(土)~26日(日)詳細は別紙

年末に大失敗をやらかした。胸骨骨折の事故を起こしてしまった。その顛末は書くのも恥ずかしい初步的ミスによる事故である。あまりに痛くて次の日に近くの整形外科に行ってレントゲンを撮ったが、骨に異常ないということで、薬もシップもなしで帰ってきた。その後も痛みは続いたが、病院はすでに年末年始の休みに入っており、痛みをこらえて正月を過ごした。正月5日に施設の整った大きい病院に行って診察を受けたところ、胸骨骨折と言われた。これと言った治療はなく、痛み止めをもらっただけだった。しかし、はっきりと痛みの原因が分かってよかった。病院でレントゲン写真とCTスキャンの画像を見せてもらったが、素人が見ても明らかに骨折していることが分かった。藪医者に腹が立つが腹を立てれば痛みが増すだけだ。私の正月はまだ来ない。(諫)

大分市下郡1602-1大分県保険医会館

NPO法人おおいた有機農業研究会 <http://www.d-b.ne.jp/oitayuki/>

おおいた有機農業推進ネットワーク <http://www.d-b.ne.jp/unet/>

TEL097 567-2613 FAX097-567-2614 メール oitayuki@po.d-b.ne.jp